

た問題を、簡単にまとめてある。

以上の内容からもわかるように、例えば 30 年以上も前に出された Gaposchkin 夫妻の同名の書や最近出版された C. Hoffmeister の“Veränderliche Sterne” (Leipzig, 1970 年刊) と比べてみると、単純に光度曲線の型から分類して、現象を記述するというやり方から抜け出し、変光星自体の物理状態の記述に重点が置いてある点に、本書の特色がある。具体的には、食変光星を扱う第 7 章で、質量交換に関連して連星の進化に触れ、またわざわざ節をもうけて、連星の起源とか連星に於ける白色矮星の生成といった問題について記述していることからわかる。これは、前書きにもあるように、変光星を恒星とその系の進化の各段階との対応で見つめてみようとする著者の気持ちのあらわれであろうし、また Gaposchkin 夫

妻の本が出版されて以来の、観測の質の向上と量の蓄積や理論面での恒星の内部構造と進化についての飛躍的な発展から求められる当然の方向でもあろう。

だが個々の記述についていうと、種々の観測結果やモデルについて吟味して整理してあるというよりは、何となく雑然と集められているという感じがしないでもない。幅広く記述するという方針とページ数の制限というところに問題があるのかもしれないが、全体を流れる著者の姿勢が個々の記述にまで生かし切れてない点は残念な気がする。

とにかく本書は、この分野の動向を手軽に知るには大変便利な本である。ただ数式に誤植やスリップがかなり目立ち、手軽に利用するにしても式のチェックは必要であろう。(岡崎 彰)

.....
掲 示 板

インド天文学会の設立

学会宛に下記のような通知がありました。
 インドにおいては長い間「天文学会」というものがあ

りませんでした。この度、国内外から約 130 人の参加を得て、インド学会 (Astronomical Society of India) 発足の運びとなりました。

当会の目的は、インドにおける天文学および関連分野の発展につくすことで、事業として季刊のニュース発行、学会の開催 (中略) 等があります。

.....
雑 報

遠方のクエーサーに水素 21 センチ吸収線

アメリカのブラウンとロバーツは、国立電波天文台の 90 メートル望遠鏡を使って、クエーサー 3C 286 に、21 センチの吸収線を検出した。

このクエーサーは輝線の赤方偏移が 0.849 (21 センチ

線の周波数では 768.0 MHz) であるが、吸収線は 839.4 MHz で観測されている。赤方偏移では 0.692 に相当する。水素 21 センチ電波で、これだけ大きい赤方偏移がみつかったのははじめてである。

この吸収が他のスペクトル線 (銀河内の分子等) の可能性はほとんどなく、また同じ観測が独立にアレシボの 300 メートル球面望遠鏡でも行なわれていることから観測誤差ということも考えられない。(森本雅樹)

1973 年 9 月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	8,	80	6	—,	—	11	3,	47	16	3,	6	21	4,	12	26	7,	51
2	—,	—	7	5,	101	12	3,	19	17	2,	10	22	—,	—	27	7,	52
3	9,	167	8	5,	87	13	—,	—	18	—,	—	23	5,	37	28	6,	49
4	9,	151	9	6,	97	14	0,	0	19	4,	8	24	6,	54	29	9,	52
5	—,	—	10	4,	68	15	1,	2	20	—,	—	25	7,	48	30	—,	—

(相対数月平均値: 76.2)

昭和 48 年 10 月 20 日	編集兼発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	森 本 雅 樹
印刷発行	印刷所	〒112 東京都文京区水道 2-7-5	啓文堂 松本印刷
定価 175 円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話武蔵野 31 局 (0422-31) 1359	振替口座東京 1 3 5 9 5